

巻頭言

三好 明

2017 年は宗教改革 500 年記念の年であった。日本福音主義神学会ではこの記念すべき年の学会誌を「福音の理解—信仰をめぐる—」というテーマのもとに出すこととした。このテーマを選んだのは、宗教改革の基本原理の一つである「信仰のみ」(sola fide) の重要性を考えた結果であることは言うまでもない。そして、それに加えて現代では、「信仰のみ」の「信仰」とは何かということをもより深く考察する必要性が生じているからである。

第一に、聖書学の分野から伝統的な信仰理解に対してなされた問いかけに答える必要性が生じている。それは特に、「パウロ神学の新しい視点」(The New Perspective on Paul 「パウロ研究を巡る新しい視点」とも訳される)からの問いかけによって起こされたものである。この新しい視点によれば、パウロ書簡のピステイス・クリストゥーは「キリストに対する信仰」というよりも「キリストの真実」であることが強調され、キリストの救いは個人的な魂の救いというよりも神の民に属する者とされることとして理解される。この問題については、本誌は第 45 号と第 46 号で賛成と反対の両方の立場の論考を掲載してきた。本号においては、さらに別の観点から問題を考察した論文が掲載されている。

遠藤氏の論文は、聖書の各文書について前景となっているテーマと後景となっているテーマを立体的に把握することの重要性を読者に示す。そして、ヨハネの福音書の信仰理解においては、「パウロ神学の新しい視点」では前景に出てこない「イエスと個々の信仰者との個別的関係性」が前景に出ていることを明らかにする。遠藤氏は「パウロ神学の新しい視点」を評価しつつも、そのみに立って福音理解の奥行きを狭めてしまうことにならないように願っている。

山口氏の論文は、ユダヤ教的黙示論を背景として、パウロが罪を宇宙的な力と理解し、キリストの十字架によって宇宙的な力である罪から解放されるとい

うことがパウロの救済論の中核であることを論じている。前号の第 47 号のテーマは「福音の理解—罪をめぐる—」であった。そこでは論じられなかった罪に関する重要な点を今回取り上げることによって、信仰とは何かという理解にも新しい視点が与えられるであろう。

第二に、信仰理解に関する異なった教派の間での対話の必要である。各教派は、それぞれ自分の教派の信仰理解を正統的なものとして堅く保持しているので、お互いの立場をよく理解しないまま他派の信仰理解を否定的に見てしまうおそれがある。しかし、謙遜な対話なくして「信仰のみ」を正しく理解することはできないであろう。日本福音主義神学会は、聖書の十全靈感という土台に立ちつつ、さまざまな教派の牧師から構成されている学会である。したがって、ルター派、改革派、ウェスレアン、ペンテコステ派というそれぞれの立場の信仰理解を、お互いの対話に資する仕方でも提示することができる。

橋本氏の論文は、ルターがなぜ「信仰義認」を強調したかという点に注目し、ルターの信仰理解を深く探求するものである。ルターに対してなされる聖化の後退や静寂主義という批判とも対話しつつ、ルターにおける「信仰」は生きてダイナミックに働く信仰であり、21 世紀の現代において大きな意味をもつものであることを論じている。

袴田氏の論文は、ウェストミンスター信仰告白のテキストを忠実に読むことにより、同信仰告白の「救いに至る信仰」の本質を論じるものである。そして、ウェストミンスター信仰告白に対する批判とも対話しつつ、同信仰告白が宗教改革者カルヴァンの神学を受け継ぎつつ牧会的に繊細な神学を展開していることを明らかにしている。

藤本氏の論文は、ウェスレーの神学が宗教改革の眼目である信仰義認の教理を忠実に受け継ぎつつ、聖化の教理を発展させることによって、信仰と行いのダイナミズムを生み出したことを論じている。そして、ウェスレーの神学が英米の信仰復興運動に貢献し、それが日本への伝道の原動力となったことを明らかにしている。

大坂氏の論文は、使徒の働きの中の説教を範例として「ペンテコステ信仰の正しい発露としての説教」について考察するものである。大坂氏は、使徒たち

の説教の特質を明らかにすることにより、ペンテコステ派の説教においても、聖霊に燃えてという態度以上に、イエスの福音という語られるべき内容が大切であると論じている。

これらの論文に加えて、今号では 2016 年 11 月に出版された『人生を聖書と共に—リチャード・ボウカムの世界—』への吉平氏による書評を掲載した。吉平氏の書評は、この書物が教会の伝道や牧会に有益な示唆を与える書であると同時に、福音派と主流派の架け橋となる優れた書でもあることを紹介している。『人生を聖書と共に—リチャード・ボウカムの世界—』は、現代における信仰理解を深める上でも必読の書であると思われる。

宗教改革 500 年記念の諸行事で多忙な中、ご寄稿くださった執筆者各位に心から感謝したい。なお、日本福音主義神学会が 2017 年 11 月 6 日から 8 日に東京において「3 つの『のみ』の再発見—宗教改革 500 年によせて—」というテーマの下に開催した全国研究会議の成果は、次号以降に掲載されるであろう。宗教改革を現代の文脈でどのように受け止めていくかということは、プロテスタント教会にとって今後も重要な課題であり続ける。

(編集委員)